第 18 回　備北地域認知症疾患医療連携協議会（H27.9.18）議事録

はじめに：

平成 24 年 11 月にスタートした当協議会は、今回をもって 3 年目の最後を迎えることとなった。これまで、「いつでも、どこでも、認知症高齢者が、必要な時に、必要な所で、必要な支援を受けられる地域づくりを目指す」をスローガンとして、地域で効果的に機能するネットワークを構築し、ケア水準の格差是正、地域全体の認知症対応力の向上を図ることを目標に取り組んできたが、いまだ充分な成果をあげられてはいない。しかし、地域における解決すべき課題を抽出し、支援者間で共有を行い、当地域で認知症高齢者、その御家族に支援を行う際に、全ての支援者が心がけるべき約束事（行動指針）を立案するなど、歩みは遅いが、少しずつ目標達成へ向けて前進しているものと考えている。引き続き、質の高い支援を提供できる地域づくりに貢献していきたい。今回の協議会では、認知症高齢者へのケースマネジメントにおいて必要とされるアセスメントスキル（現状を正しく評価する力）について、参加者全員で考え、そのスキルアップをはかる場とした。

第一部：認知症スキルアップ研修①（全体討議）

これまでの協議会において、担当者会議等で解決策を導き出せる有意義な質の高い相談を可能にするために必要なこと、適時・適切な医療・介護等を提供するための第一歩である「気付き」を可能にするために必要なこと、より広い意味での支援者による認知症高齢者虐待を防ぐために必要なこと、そして、何よりも優先して実現しなければならないことは、支援者個々のスキルアップであることを確認した。支援者個々のスキルアップをはかることで、結果として、施設や事業所全体のケア水準の向上、質の高いネットワークの構築、地域全体の認知症対応力の向上へと繋がっていくと考えるからであるが、それでは、支援者個々に求められるスキルとは何であろうか。それは、質の高い支援を提供するスキルであり、その質の高い支援とは、必要な時に必要な所で提供される必要な支援、つまり「的を射た支援」であると考えることができる。的を射た支援を提供するためには、質の高い情報を収集し、現状を正しく評価することが、必要不可欠である。すなわち、現状を正しく評価することは、質の高い支援、ケアを提供するための出発点ともいえる。現状を正しく評価できてこそ、次の支援者に正しい情報を伝達することができ、また自身でもその評価に基づき質の高い支援、ケアを提供することができる。逆を言えば、現状を正しく評価できなければ、質の高い支援、的を射た支援はできないということになる。第一部では、支援者が現状を正しく評価できていないために、適切な支援を提供できていないと考えられた実症例を事務局より提示して、現状を正しく評価することが、適切な支援を提供するうえで、いかに重要であるかを参加者全員で学んだ。症例については、個人情報保護のため割愛する。

第二部：認知症スキルアップ研修②（グループワーク）

第二部では、第一部において得られた課題である「我々支援者のアセスメントスキル不足から引き起こされる問題をなくすための方策」について、グループに分かれ討議を行った。主な意見を以下に記す。

＜参加者からの主な意見＞

解決すべき現状の問題：

- アセスメントの仕方がわからない
- ケアマネは、自分一人の考えだけで計画、調整をしがち
- 保健師は、なんでも話すように指導されているが、一人仕事である
- 自分の考え方が偏りがち
- デイサービスに行けば安心という考え方ではいけない。手段であって目標ではないはず
- 注意をしたところで、変化がない
- 時間がない
- ケースを共有したいと思うが、全てはできない
- 相談する機会が少ない
- 多職種で相談・情報交換できる場がない
- そもそも問題に気づけない
- 問題が起きてはじめて、アセスメントが不十分だと気付く
- 問題が起きなければ、そのままになりがち
- 疑問を感じても言いづらい
- 問題に気づいても、自分に自信がないので言えない
- 担当者会議等しても、元々立てられていた支援内容が修正されることは少ない
- 研修会はあるけど、足並みがそろっている気がしない
- 職種や事業所によって相談の機会に違いがある
- 自分から発信しないと指導されない
- 間違いや疑問に気づけない人は、指導を受けられない
- 経験を重ねることで偏りが出てくることもある

解決策：

- 情報収集が必要
- 正しく情報収集できているのか確認し合う
- 本人に着目する
- 相談できる関係性を気づいておく
- 同職種間で話し合う機会をつくる
- 同じ事業所内で話し合う機会をつくる

- 事業所内だけで完結せず、地域の他の事業所との交流を増やす
- 他の事例について学ぶことでスキルアップをはかる
- 研修会への参加を促す
- 自分以外の視点を知る機会をつくる
- 他のスタッフからの指導を受けられるようにする
- 指導者をつくる
- 指導者のスキルアップをはかる
- 家族会等に参加して学ぶ
- 多職種のチームの中での自分の役割を意識できるようにする
- 基本に立ち返る勉強会を行う
- 経験年数に相応の研修会を行う
- 事例を通して指導をする
- まず考えてもらえるような問い掛けをする
- 様々な立場から考えられるように促す
- 相手に合った伝え方、聞き方を指導者側が考える
- 勉強会で自分が学び成長し、周囲に伝える
- まずはリーダーがスキルアップし、周囲にアセスメントの仕方を伝えていく
- ミニカンファレンスを行う
- ケース会議を開催し、自分で組み立てたプランを伝える
- 上司にアセスメント内容をチェックしてもらう
- 自分が模範を示す
- ファミリーマップを使う
- 日頃から指導を習慣づける
- 支援が上手くいっているときには支持して自信を持てるようにする
- 成功事例を共有する
- 失敗事例も共有する

まとめ：

今回、事務局より提示した実症例を通して、認知症高齢者に適切な支援を提供するうえで、現状を正しく評価すること（アセスメントスキル）がいかに重要であるかを参加者全員で再確認した。そして、我々支援者のアセスメントスキル不足から引き起こされる問題をなくすための解決策について討議を行った。これまでの協議会で取り上げてきた症例と同様に、今回提示した症例も、かかりつけ医、地域包括支援センター職員、ケアマネジャー、デイサービス職員と多くの支援者が関わっていたにもかかわらず、現状の評価が不充分なために、結果として「的を射た支援」を提供できていなかった。関わっていた支援者のうち一人でも適切な現状評価ができれば、支援の方向性が変わり、「的を射た支援」の提供へと移行できていた可能性を否定できない。支援者

が、実際に「的を射た支援」を実践できるかどうかは、また別の課題であるが、まずは、現状を正しく評価することで、支援者が「的を射た支援」を提供するためのスタート地点に立つことが重要である。現状の地域事情は、「的を射ていない支援」を正すための安全システムが無いか、充分に機能していないと言わざるを得ない。支援の現場において、誤った支援の方向性を正すべき指導的役割を果たす支援者の不在が、当地域の解決すべき大きな問題と考える。今後の協議会では、「支援者個々のアセスメントスキル養成のための指導者育成」を最優先課題に掲げ、様々な取り組みを展開していきたい。